

巻頭言

さまざまな方々の「声」に耳を傾けながら

臨床心理学部 学部長 香 川 克

京都文教大学が創設された際の臨床心理学科のメンバーのお一人で、人間学部長・臨床心理学研究科長、そして2008年度から2013年度までは本学の学長も務められました、鑑幹八郎先生が、2021年5月7日にすい臓がんのため、永眠なさいました。1996年の本学の設立以来、2000年・大学院臨床心理学研究科の設立、2005年・博士（臨床心理学）の輩出、2008年・臨床心理学部の設立と、本学の臨床心理学が発展する際には、いつもそこに鑑先生のお姿があり、鑑先生のリーダーシップがありました。思い返すと様々な鑑先生の姿が思い出されます。急なご逝去を耳にして、さみしくなりません。本号には、本学の先生方の鑑先生への追悼の思いを編んだ特集を掲載することとなりました。先生方のそれぞれの深い思いがつつられています。

今、私の手元に、「境界を生きた心理臨床家の足跡」（岡本祐子編著・ナカニシヤ出版）という本があります。この本は、岡本祐子先生と山本力先生のお二人が、鑑先生がご自身の人生を語ったものをまとめられたものです。もちろん、京都文教大学でのお仕事にも触れられています。聞き書きですから当然なのかもしれませんが、この本を読みますと、鑑先生のお声が耳に蘇ってくるようです。謹んで、鑑先生のご冥福をお祈り申し上げます。

また、本号には、もう一つの特集が掲載されています。これは、ここ数年で本学に着任した准教授・講師の3人の先生方が、文献研究・質的研究・事例研究についてそれぞれ論じ、全体を臨床心理学に関する研究の特集として濱野研究科長がまとめたものです。3人の先生方による、大学院博士前期課程の大学院生に向けた「研究に関するシンポジウム」を元にしつつ、さらに考察を深めた論文です。

公認心理師の資格養成が始まり、新しい時代の新しい心理臨床教育の中で、研究の持つ重要性は、これまで以上に高まるでしょう。この特集は、そういった新しい方向へ向けた本学の挑戦の記録です。文献・面接調査・臨床事例といった、物語としての性質を持つ資料と向き合う中で、研究者がどのように格闘しているのかが、それぞれの語り口で表現されているように思われ、論文を読む中で、先生方の声が、そのまま耳に蘇ってくるように思われました。

先達としての鑑先生の声に導かれて、私たちの学部はここまで来ました。そして、これからの時代を作っていく方々の声も響き始めています。多くの方々の声に耳を傾けながら、本学部における研究がさらに深まるよう、努めていきたいと思います。

